

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18330168
 研究課題名（和文） 近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究
 研究課題名（英文） Comparative Study on the Relationship between Colonial Experience of Modern Japan and Identity Formation through Historical Approach on Education
 研究代表者
 駒込 武（KOMAGOME TAKESHI）
 京都大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：80221977

研究成果の概要（和文）：本研究では、「アイヌ」「沖縄人」「台湾人」「朝鮮人」というアイデンティティがどのように成立し、変容したのかという問題を比較史的視野から考察した。研究の実施にあたっては、フィールドを異にする研究者が現地をともに訪れることによって、それぞれの地域の「いま」が抱える問題を共有しながら歴史認識を深めることを重視した。研究の結果、空間的・社会的移動の可能性が比較研究の軸とされるべきことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the problem how the identity as an 'Ainu', 'Okinawan', 'Taiwanese' or 'Korean' was organized and transformed through comparative studies on history. In performing the research, we thought it necessary for the members majoring in different fields to visit the same field together in order to deepen our historical perception, sharing the contemporary problems in the field. Through the research, we recognized the fact that the possibility of spatial and social mobility should be regarded as an axis for the comparative studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	8,300,000円	2,490,000	10,790,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：アイヌ、沖縄、奄美大島、台湾、朝鮮、植民地、教育、アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

近年、政治・経済・文化の各分野におけるグローバル化の進展と共に、あらためて「国際理解」の重要性が浮かび上がってきている。しかし、「国際理解」という概念は、ともし

れば、共通の言語・文化で結びついた均質な「国民」と、もう一つの「国民」との関係として理解されがちである。しかし、実際には、いわゆる「日本人」の中にも「アイヌ」―「シャモ（和人）」という関係や、「ウチナンチュ（沖縄人）」―「ヤマトンチュ（大和人）」と

いう関係が存在する。また、在日朝鮮人や在日台湾人のように旧植民地からの移住者が居住している。こうした状況は、日本に限られることではない。たとえば、いわゆる「イギリス人 British」の中でも「スコットランド人」は「イングランド人」とは明確に区別されたアイデンティティを保持している上に、イギリス社会にはインドなど旧植民地の出身者が数多く居住している。このような多民族・多文化的状況は、世界史的に見ても普遍的かつ一般的な事態なのであり、実り豊かな「国際理解」を実現するためにも、日本社会における多民族・多文化的状況への認識と感受性が不可欠である。こうした状況認識が、本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、①学校教育の役割に着目しながら植民地経験とアイデンティティ形成をめぐる問題を比較史的に考察するとともに、②近代日本の植民地主義に関して世界史的視野から比較研究を展開するための人的ネットワークを構築し、③資料集の編集などを通じて多民族・多文化的状況への認識・感受性を広く社会的に共有していくことである。

本研究では、近代日本の植民地（「内国植民地」とされた北海道や沖縄を含めて考える）において「アイヌ」「沖縄人」「台湾人」「朝鮮人」というアイデンティティがどのように成立し、変容したのかを解明する。ここで、アイデンティティの成立に着目する理由は、政治的・経済的・社会的な力関係が「民族」や「文化」の問題とみなされるプロセス自体を検討する必要があると考えるためである。

植民地主義的な権力関係において学校教育は「民族的」な「文化」の問題に翻訳する装置としての役割を果たしたが、社会生活一般においては「文化」の問題には翻訳しきれない、多様な「植民地経験」が存在した。また、学校教育の中でも、日本語・日本文化という観念の純粋性を維持しようとするからこそ、そこに内在する複数性が顕在化することもある。本研究では、「植民地経験」が、「民族的」な「文化」の優劣に還元できない経験を包含するものであったことに着目しつつ、今日の多民族・多文化的な状況の中に植民地主義的な権力関係がどのように刻み込まれているのかということを解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 比較研究のための人的ネットワークの構築

本研究では、台湾史を専攻する研究代表者のほか、沖縄史専攻の富山一郎（連携研究者）および鳥山淳（研究協力者）、朝鮮史専攻の板垣竜太（連携研究者）、アイヌ史専攻の小川正人（研究協力者）により「コア・グループ」を形成して相互に報告・討論を重ねると同時に、それぞれが従来の研究フィールドで蓄積してきた知見や人的ネットワークの共有に努める。具体的には、現地をともに訪れ、資料調査を行うとともに、人的ネットワークを相互に接続していくことを企図する。また、大規模な「国際会議」の開催という手法とは対照的に、それぞれの地域の「いま」が抱える問題を切実に意識しながら、新しい歴史認識を生みだそうとしている若手研究者と少人数で時間をかけて討論することを重視する。

(2) 現状認識と歴史認識との往還関係

本研究計画において(1)で述べたような方式で人的なネットワークを構築しようとしているのは、それぞれの地域における「いま」をめぐる問題状況が歴史認識に影響を与え、歴史認識が「いま」の状況の中で政治的な働きかけとしての意味を持つという、「現状認識と歴史認識の往還関係」に対して自覚的であることが不可欠と考えるからである。日本の植民地主義と深く関わる現象であるとともに、地域の住民にとって「いま」にかかわる切実な問題であるにもかかわらず、日本「本土」のマス・メディアではほとんど報道しないために、大きな意識の落差が生じている出来事が数多くある。こうした落差の存在を自覚しつつ、現状認識と歴史認識との往還関係を発展的に深めていくことを本研究では重視した。

4. 研究成果

(1) 研究会の開催

本研究では2006（平成18）年度から2009（平成21）年度にかけて下記のように研究会を開催してきた。

2006年度には京都で2回の研究会を開いたほか、北海道、奄美大島でも研究会を行った。2007年度には京都で5回の研究会を開いたほか、イギリスで研究会を行った。2008年度には京都で5回の研究会を開いたほか北海道、奄美大島・鹿児島で研究会を開いた。2009年度は京都で3回、東京で1回の研究会を開いたほか、奄美大島で研究会を開催した。

こうした研究会の開催を通じて、比較研究のための人的ネットワークの構築という課題はかなりの程度達成することができた。

(2) 奄美大島の重要性への着目

当初の研究計画には含まれていなかったが、本研究計画の実施過程で、奄美大島の重要性に着目するにいたった。奄美大島は、近世における植民地支配と近代の植民地支配の相違を考える上でも、鹿児島から台湾へいたる「琉球弧」における人の移動とう点でも重要な位置を占めていると判断したためである。

2008年度の奄美大島における研究会では現地の郷土史家ばかりでなく、北海道在住のアイヌ言語文化研究者である本田優子にも参加してもらい、日本の「北方」をめぐる問いと、「南方」をめぐる問いをリンクさせて考える場とした。この研究会は大きな反響を呼び、現地で刊行されている『南海日日新聞』（2009年1月13日）で報道された。

2009年度の奄美大島訪問に際しては、奄美共産党関係の研究業績のある森宣雄にも参加してもらい、奄美大島と沖縄における「戦後」の関係について議論した。また、徳之島町立図書館および伊仙町歴史民俗資料館で奄美近現代史資料にかかわる資料調査・収集、奄美大島教育会館で松田清文庫の資料調査を行った。

なお、旅費の多くを奄美大島訪問にあてたこともあって当初予定していた台湾・韓国訪問は実現できていないが、京都で開催する研究会に台湾史研究者や朝鮮史研究者を招くことにより台湾・朝鮮をめぐる議論を深めているほか、台湾や韓国で刊行される雑誌への寄稿や講演、著書の韓国語版の刊行などを通じて現地の研究者との対話を継続している。

（3）Racism 概念の検討

2007年度においては研究会のコアメンバーがイギリスを訪問し、シェフィールド大学の Richard Siddle 教授や、グラスゴー大学の Satnam Virdee 教授とともに研究会を開催した。これらの研究会においては、英語圏で用いられている Racism という概念が日本をめぐる植民地支配の経験を考察する上でも有効であることが確かめられた。ただし、Racism という概念自体が多義的であり、日本における Racism に固有の問題を明確化するにはさらに議論を積み重ねる必要がある。

こうした視角は、日本における植民地主義研究を英語圏などにおける植民地主義と関連させていくためにも必須であることが明確になった。

（4）空間的・社会的移動と教育の関係性についての着目

本研究の研究成果のひとつは、「植民地」とは何かという問いを深化させるためにも、空間的・社会的移動と教育の関係に着目することの重要性であり、このような軸を設定することにより、いわゆる「植民地」の経験を

琉球諸島や奄美諸島、北海道における経験との連関の中で論じることができるということである。

台湾・朝鮮などいわゆる「植民地」の特徴は、「内地渡航制限」というような形で空間的移動を厳しく制限されると同時に、高級官僚における植民地出身者の少なさに象徴されるように社会的な上昇移動の機会も限定されていたことである。ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』における「巡礼圏」という言葉が示唆するように、植民地出身の官僚は「本国」の政治的「中心」からも植民地統治の中枢からも疎外されて、下級官僚として植民地を「巡礼」し、その中で共通の運命の下にある「同胞」を発見することになった。空間的・社会的移動において教育は重要な位置を占めたが、植民地住民向けの「簡易」「実用的」な教育は「本国」からの移住者との格差を再生産する装置となった上に、たとえ留学して高学歴を取得した場合でも官吏への任官・企業への採用などの局面で差別に直面し、格差を固定する職業分布が構成された。教育に託された「夢」はしばしば失意に終わり、この失意の中から植民地ナショナリズムが誕生することになった。

このような「植民地」をめぐる状況との対比で浮かび上がるのは、次のような問いである。琉球諸島や奄美諸島や北海道の人びとにとって空間的・社会的移動の可能性はどのような方向に開かれ、学歴取得はどのような特徴を持ち、どのような職業分布が構成されてきたのか。また、空間的・社会的移動がごく少数の「立身出世」した人物を生み出すに止まり、脱「辺境」を目指した動きが全体として「内地」における底辺労働力としての流出に帰結する傾向が強かったとしたら、それはなぜなのか。今後は、さらにこうした問いを深めていく必要のあることが認識された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

①板垣竜太、指紋押捺経験をつなぐ：「お前は誰だ！」をめぐる政治と記憶、日本学報（大阪大学）、査読無、29号、2010、17-36

②板垣竜太、人種主義、植民地主義、多文化主義のポリティクス、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、査読有、86号、2010、3-9

③駒込武、台湾史研究の動向と課題—学際的な台湾研究のために—、日本台湾学会報、査読無、11号、2009、75-89

④板垣竜太、批判と連帯：日韓間の歴史対話に関する省察、文化人類学、査読有、74(2)号、2009、293-315

⑤板垣竜太、日韓会談反対運動と植民地支配責任論：日本朝鮮研究所の植民地主義論を中心に、思想(岩波書店)、査読無、1029号、2009、219-238

⑥富山一郎、土着與流亡の邂逅、台湾社会研究季刊、査読無、72号、2009、191-203

⑦板垣竜太、近代朝鮮の地域社会における「青年」、アジア民衆史研究、査読無、13号、2008、55-78

⑧板垣竜太、「文字と無文字のあいだ」について、韓国朝鮮の文化と社会、査読有、6号、2007、7-21

[学会発表] (計 11 件)

① Itagaki, Ryuta, Politics of Fingerprinting: Colonialism, the Cold-War, and Globalization, UCSD 文学部主催講演会、2010年2月19日、La Jolla, CA: University of California, San Diego

② Itagaki, Ryuta, The Politics of "Illicitly Brewed Liquor" in Colonial Korea, Harvard-Yenching Institute Weekly Talk Series, 2009年12月11日、Cambridge, MA: Harvard-Yenching Institute

③ Itagaki, Ryuta, On Colonial Responsibility, コーネル大東アジアプログラム主催講演会、2009年11月12日、Ithaca, NY: Cornell University

④富山一郎、記憶という問題あるいは社会の未決性 (openness) について—沖繩戦後史から考える—、釜山大学韓国民族文化研究所プロジェクト「ローカリティの人文学」、2009年10月30日、釜山大学(韓国)

⑤駒込武、植民地支配下台湾的「公共圏」、国際学術研討会「殖民主義與文化」、2009年9月21日、成功大学(台湾)

⑥Komagome, Takeshi, Liberation through Education?: Rethinking the Experience of Colonial Modernity, The 9th International Conference of Educational Research, 2008年10月27日、ソウル大学校(韓国)

⑦ Komagome, Takeshi, For Comparative Studies on Imperialism, 国際学術検討会

Comparative Perspective on Colonialism and Culture, 2008年9月5日、中央研究院台湾史研究所(台湾)

⑧板垣竜太、批判と連帯：日韓間の歴史言説に関する省察、日本文化人類学会・第42回研究大会、2008年6月1日、京都大学

[図書] (計 10 件)

①板垣竜太(共著)、明石書店、朝鮮半島のことばと社会、2009、558-595

②駒込武(共著)、青弓社、歴史と責任：「慰安婦」問題と一九九〇年代、2008、152-162

③板垣竜太、明石書店、朝鮮近代の歴史民族誌—慶北尙州の植民地経験—、2008、414

④富山一郎(共著)、ポスト・ユートピアの人類学、人文書院、2008、341-376

⑤駒込武(共著)、歴史批評社、植民地帝国日本の文化統合(韓国語版)、2008、540

⑥駒込武(共著)、昭和堂、帝国と学校、2007、1-32

⑦駒込武(共著)、名古屋大学出版会、東アジア国際政治史、2007、179-210

⑧駒込武(共著)、ミネルヴァ書房、昭和・アジア主義の実像—帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」、2007、259-285

[産業財産権]

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

駒込 武 (KOMAGOME TAKESHI)
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：80221977

(2) 研究分担者

富山 一郎 (TOMIYAMA ICHIRO)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50192662
(H20→H21：連携研究者)
板垣 竜太 (ITAGAKI RYUTA)
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：60361549
(H20→H21：連携研究者)

(2) 連携研究者

()
研究者番号：